わたしはこうして焚き付けた

重複する内容を一部省略しています

やっぱりストーブでしょう。焚きつけ口の下に新聞紙、小枝なども燃やし少しずつ小さい物から順に亜炭をのせていき、火勢が強くなったら蓋をしておき、時折つぎ足して火勢を保つ。　太白区　A

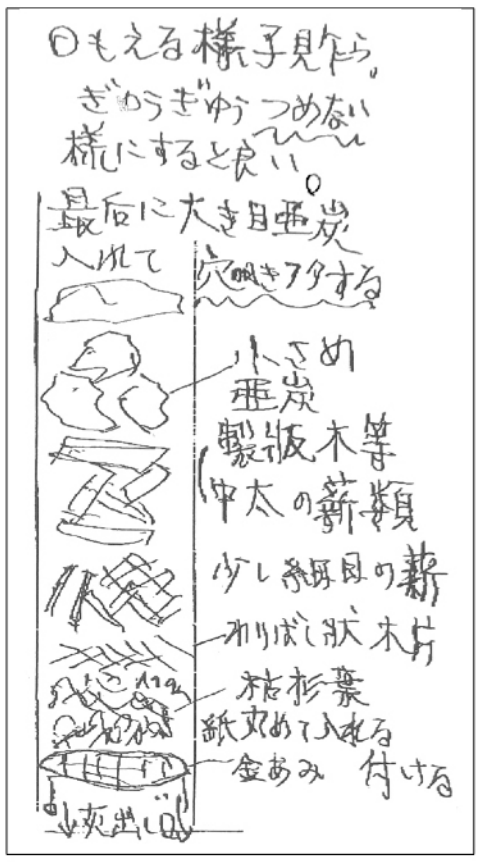
昭和30年～40年代前半ころ、風呂焚きの燃料としていた。近くの燃料店から大きな塊のまま購入し、軒下で雨に当たらないようにして保管した。それを手斧で適当な大きさにして乾燥させ、風呂の燃料とした。当時、両親と小学生の子供２人で６人家族であった。亜炭の準備は私がやっておった。風呂焚きは家の女性がした。亜炭は多くの灰が出るので、その始末は手間がかかった。焚きつけ用のこっぱや薪を少し入れて火をつけてから亜炭を入れた気がする。直接やることはあまりなかった。昭和30年代まで鉄砲風呂であった。昭和29年から43年まで市内中学校のストーブ（教室）の燃料は亜炭であった。自分が勤務した学校のことです。焚きつけにこっぱなど使うが、当番の生徒により焚きつけの上手・下手があるのか、朝会後教室に行くと教室が煙で話できないことがあった。　青葉区　W

１）杉っ葉にマッチで火をつけ燃え上がりを見て杉っ葉２・３枚を重ね入れる。
２）枯枝や木端を入れ燃え具合を見て多少の薪を入れる。
３）燃え上がるタイミングを待ち亜炭を加え続け燃やす。
※当時紙は貴重な物で新聞・雑誌は便所紙として使用していたため、紙の使用は全くなかった。　宮城野区　K

亜炭の焚きつけは、県北の亜炭は枝の細いたき木で亜炭を小さくたたいて、木が燃えたところに焚口から（鉄方と言いました）木の燃えた所を見て亜炭を入れました。またはスミスゴと言って木炭のはいってた物、これが一番良かったね。スギ葉と言って杉の木の葉のかわいたのにマッチで直接火をつけて燃やしましたね。八木山の亜炭は簡単に火がつきましたよ。（八十七歳の老婦が思い出すのは仙台弁でアッペトッペでご免なさい）　泉区　N

焚きつけは親がしていたので苦労した記憶はありませんが、亜炭が燃えやすいように「せいばん木」という薄いたきつけ用の薪をほどよい長さに割ったり切ったりして準備しておくのも、子の仕事だったような気がします。　青葉区　T

冬が近くなると学校から杉の葉を集めるように言われたものです。まずマッチで新聞紙に火をつけ、その上に杉の葉を置くとパチパチと燃えます。そこに亜炭を置くとわりと簡単に火がつきました。石炭では絶対こうはいきません。石炭よりはるかに軽いし粗いし、火が付きやすく燃えやすいのです。　泉区　S



小学校・中学校・高等学校の暖房用に鋳鉄製のダルマストーブを用いて亜炭で暖をとっていた。亜炭はイタやコイタが灰化したもので、おので木材をわかるように切って使っていた。　O

はじめに火つけに新聞紙をもやしてコッパ（といったかな）に火をつける。しばらくコッパを燃やしてから亜炭に火がついたようでした。その後、亜炭からコークスという燃料に変わったようです。煙で目がいたくなりすすけて顔もまっ黒になることがあります。戦時中は外で鉄の棒をくんだ△の中で亜炭をもやし、煙が出なくなったらその火を家の中にもってきたり、暖をとったりにたきをしたりしました。火もちがよく火力もあったようです。　太白区　N

小３の時、鉄砲風呂が入り自宅で風呂に入れるようになった。新聞を丸めて火をつけ、焚口から入れて杉の皮のついた木を入れた。その後、亜炭を入れた。亜炭カスをとる時は手が汚れた。　青葉区　K

風呂での焚き方は新聞紙に火をつけて、次に「木っパ」とよばれる製材のときの端材につけて、最後に亜炭に火を移し風呂を沸かすという手順です。うまく燃え上がらないと煙でいぶされ、なれてくるとスムースに燃え上がる。　泉区　T

「せいはん木」新聞紙等で火をつけ、「せいはん木」に着火したら亜炭を入れる。今回この用紙をみて懐かしく、子供にも話して聞かせました。　若林区　Z

薪を小割りにして紙と同事着火した。亜炭を乾燥させる。　青葉区　K

私の子供の頃はおふろは別棟にございました。風呂釜は鉄のタテテッポー。風呂釜上から紙くずに火をつけ入れ、次は細い薪、次に太い四割マキで焚き、最後に亜炭で焚いておりました。火止めにはとても良かったようでした。12人の家族が入りますので大変でした。　W

昭和23年頃からの思い出です。雨の日は予備火のまきがなく、新聞がみを使うのがなかなか亜炭に引火しなくって泣き泣き火たきをしました。　太白区　A

よく山に入ってスギッパ（杉葉）を集めたものです。枯れた杉の葉を藁で結い、手頃な大きさにします。こういうものを数多く作り積み上げておきます。亜炭も一週間分割ってきれいに重ねておきます。父や祖父が置いた亜炭は、奥に私たち兄姉が割った亜炭は手前に重ねます。
１．マッチでスギッパに火をつけます。
２．薄い木板（当時はソッペと言っていた）を上から入れていきます。
３．薄い亜炭から順に入れていきます。
※梅雨時、雨・大風で濡れると大変でした。風呂焚きは子どもの仕事です。　柴田郡　S

亜炭というと何かしら郷愁を覚えます。亜炭は確か藁で作られた莚の俵に入れて貯蔵されていたと思います。なかなか火を付けるのに大変で、経木から製版木をサンダルに組んで、その上に亜炭を乗っけて着火したと思います。風呂釜は鉄砲風呂と円柱形の釜を使用していました。　青葉区　Y

大きなかたまりの亜炭を使用する分だけ箱に取り（小さくして）風呂釜の脇に置き使用した。風呂は「鉄砲釜」というものであった。
１）最初に新聞紙・紙を、次に杉廃材を鉈で細かくしたものを入れ着火させる。杉材に燃え移ってから少し間をおいてブナ廃材を入れ、これでほぼ釜が暖まる。
２）釜全体が暖まったところで亜炭を入れ湯を沸かす。加減をみながら少し前に亜炭を入れるのをやめ、釜上部のふたを閉める。亜炭の炭火だけにしてそれで終わりにする。
３）炭湯を沸かすようなときは、加減をしながら亜炭を入れ沸かす。　若林区　S

中学生の頃（昭和27～30年）風呂をわかすのは私の仕事でした。燃料は亜炭。風呂ガマの下の方にタキギを立てていれて、下から紙に火をつける。タイミングを見て上から亜炭のカタマリを入れる。うまくすると燃えてくれるが、タキギが早目にくずれるとダメ。もう一度やり直しとなりました。教室のストーブも亜炭でしたが、基本的には同じと思います。　泉区　W

子供の頃我が家のお風呂は亜炭が主なお風呂でした。風呂桶は小判型の木でできていて、その横に鉄の箱の燃料を燃やすところがついていて、木工所で売っていた「せいはん木」というくず木に火をつけ、亜炭を入れて風呂焚きをしていました。亜炭・石炭は台所の横の小さな小屋において、バケツのようなものに入れて風呂場に運んでいました。　若林区　Z

枯れた杉っ葉、小枝、亜炭を少し薄く割り上手に重ねてました。また、冬場は燃えている亜炭の上に亜炭を上げて火持ちよくしていました。広告紙は余り無い時代、杉葉は貴重なものだったそうです。古新聞紙をネジリ火をつけたとも聞いています。　青葉区　W

杉っぱ（杉の葉の枯れたの）を束にして燃やします。その上に枯れた枝を束にして燃やします。太い木の枝を燃やします。これが足りないと亜炭に火がつきません。太い木の枝をぼおうぼおうと燃やして（オキ）もえた木が赤くなったのがいっぱいでたら亜炭の小さいのを少しずつくべるのです。　黒川郡　N

別に難しくもなく、新聞紙を硬く丸めてチョウナで細かく砕いた亜炭を上から入れた。　無記名

『亜炭香古学』　── 足元の仙台を掘りおこす ──　　せんだいマチナカアート２０１２

せんだいマチナカアート2012「亜炭香古学」は
皆様のご協力のおかげをもちまして
盛況のうちに無事終了いたしました。
企画段階からお世話になった方々、
アンケートにご協力いただいた方々、
貴重な埋木細工や資料をお貸しいただいた方々、
そして展示・トークにお越しいただいた皆様に
関係者一同心より厚く御礼申し上げます。

すっかり過去の遺物と思っていた亜炭と埋もれ木に、
未来との接点が立ち上がりつつあります。
目からウロコのおもしろいことに出会ったら、
亜炭香報は、ときどき発刊する予定です。

今後ともご愛読のほど、よろしくお願い申し上げます。

亜炭香報のバックナンバーは以下のサイトでご覧いただけます
http://sendaicf.jp/machinaka2012/blog/date/

主催／仙台市，（公財）仙台市市民文化事業団　企画構成・亜炭香報編集／伊達伸明

ご来場御礼